

場からはどのようにして民族と大地が結合して運動を生じるのかという中間項としての社会科学的運動法則への考察を無視したものとされた。そしてラッツェルの地理学説を論理的支柱とした地政学も、戦争を必然の空間闘争として弁護し、国家の拡大傾向を助長するものとして非難されたのである。ラッツェルの地理学説がこのように地政学において捉えられたようなものとして単純化し得ることには異論があるが、その検討は別として、少なくとも地政学においては多くの論者により、ラッツェルはほぼこうした一面的解釈で取り入れられた。そこで、[地政学=背景としてのラッツェルの国家有機体説]という図式が、地政学の評価の基底にできあがったのである。これには、ドイツにおける地政学隆盛の軸であったハウスホーファー (K. Haushofer) の地政学観が大きく関わっている。

このように、地政学は、政治学の一分野として当初認識され、地理学者側からの言及においてはその学問的内容の不明瞭さへの懐疑的態度もみられた。例えば、佐々木 (1927) によれば、「私見をもってすればこの人達 (地政学研究者一筆者注) の物の考え方にはともすればゲオ (土地) とポリティック (政治) との間に直ちに因果関係を結びつけんとする傾向があり、両者の間に必然に入るべき経済地理学的見地よりする過程を飛躍しているので往々論理的錯覚誤謬をおかすのではなからうかと思われるのである。(中略) 吾人の願わしきは、この学統に於いて今少し地理学的反省をもって十全の地理的材料に基づきその学問としてのシステムをたてられることである」として、その論理的単純性と実証性の確保の必要が指摘されている。しかし、1930年代後半に入ると、日本の帝国主義政策の拡大に伴い、日本的性格づけを試みた、科学というよりは精神運動的色彩の濃い、京都帝国大学を中心とする地政学派も登場する¹⁰⁾。そして、地政学はその論理的脆弱さを抱えたまま精神主義的粉飾をもほどこされて、多くの地理学者を取り込んでいくのである。また、1941年11月10日には「日本地政学協会」が創設され、地理学者の多くがこれに参加し (第1表)、雑誌「地政学」が創刊された。戦時体制が強化されるにつれ、印刷用紙の統制が厳しくなり、多くの地理学関係雑誌が休刊させられる中、国策施行に貢献あ

りと認められたこの「地政学」と目黒書店の「国民地理」のみが発刊されることとなるのである (多田, 1975)。では、この「日本地政学協会」と「地政学」という雑誌の性格はいかなるものだったのか簡単に触れてみよう。

日本地政学協会は、その使命を「高度国防国家の建設に貢献せん事を期するもの」と明記し、今までの地理学的見解が往々にして欧米を中心に論述され、歪められていたと批判し、日本を中心とする学的発足を試みるためのものと自らを位置づけている。協会の会長も海軍の上田良武¹¹⁾であり、戦時体制協力的な使命を当初から意識的に担っていた。雑誌「地政学」の構成も、論説/資料・図説・東亜の地誌・地方研究¹²⁾の他に、大東亜戦争日誌を掲載し、その読者層も上級軍人を中心に軍人層に広がっていたことが指摘されている¹³⁾。また、論説/資料の執筆者には陸軍関係機関をはじ

日本地政学協会

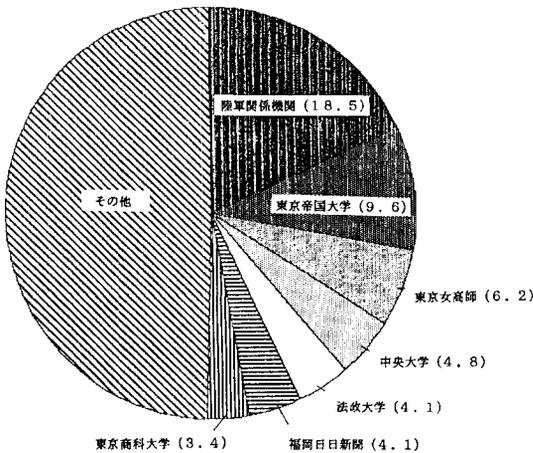
(昭和十六年十一月十日創立)

評 議 員										賛 助 員				顧問							
法	理	法	法	法	理	理	理	文	文	陸	文	法	理	文	理	文	理	文	理		
学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学		
士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士		
植	石	飯	非	阿	秋	山	永	高	今	石	阿	村	神	岡	田	川	田	川	田		
田	井	本	口	部	保	根	井	藤	井	井	橋	部	川	川	田	川	田	川	田		
捷	清	信	一	五	次	新	柳	高	藤	井	橋	部	川	川	田	川	田	川	田		
雄	彦	之	郎	郎	郎	次	平	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	
参																					
文	理	法	法	法	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	
学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	
士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	
有	渡	守	松	英	鳥	注	高	田	田	佐	黒	木	神	川	川	江	上	内	内	内	
高	邊	美	下	山	村	橋	中	中	中	藤	正	下	川	原	原	澤	田	田	田	田	
巖	男	雄	壽	道	一	郎	吉	爾	爾	爾	爾	爾	爾	爾	爾	爾	爾	爾	爾	爾	
主 監 理 常 務 會																					
法	理	法	法	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	
事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	
士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	
廣	吉	守	川	井	飯	上	綿	花	内	多	武	下	幸	國	金	帷	帷	帷	帷	帷	
田	川	屋	原	口	本	田	貫	井	藤	田	見	村	田	松	生	子	子	子	子	子	
夫	季	滿	美	次	一	信	良	勇	重	智	芳	彦	清	久	啓	二	二	二	二	二	二

第1表 日本地政学協会役員一覧 (資料:雑誌「地政学」創刊号)

めとして大学、新聞社等の所属者などを含み（第1図）、内容的には、抽象的方法論と、地誌に地政学的解釈と称するかなりこじつけ的な説明が加えられたものが多くを占めている。つまり、地政学の科学としての学問的確立を常に国策協力とリンクさせたために結果的に学問的深化の伴わない抽象的空論と実用的知識の寄せ集めにすぎなくなってしまったわけである。

こうした地政学の日本における展開が、帝国主義政策の御用学問として断罪される原因となるわけだが、一方で、地政学がもてはやされた陰に当時の地理学（特に人文地理学）の学問としての基盤や果たすべき役割への疑問があったことを指摘することができる。本論文で取り上げる江澤譲爾も、先に述べたような帝国主義的国策につながった時局迎合的な地政学に近づいたというよりはむしろ、地理学の学問的位置づけに疑問を抱いた結果として地政学へ言及していくのである。次節では、江澤の地政学を当時の人文地理学をめぐる学問的環境を視野に入れて論じてみよう。



第1図 雑誌「地政学」・論説／資料所属別執筆割合 (%)

(雑誌「地政学」第1～3巻より作成)

(注) 執筆者総数146名より算出。複数回執筆している論者は各回1名として計算した。なお、陸軍関係機関は東亜研究所、陸軍経理学校等を含んでいる。また、福岡日日新聞は金生喜造氏（のちに西日本新聞参与・福岡拓殖専門講師）、東京商科大学は江澤譲爾氏各々1名のみ。さらに、外国論文和訳の場合は翻訳者は計算に含んでいない。

2. 江澤譲爾の地政学の特徴と背景

① 江澤譲爾の略歴

江澤は、1930年3月に東京商科大学（現・一橋大学）を卒業、明治大学を経て東京商科大学講師となり、1941年4月に東京商科大学予科教授となった¹⁴⁾。大学時代においてはドイツ文学・文学史の吹田順助の指導を受け、また、経済哲学の左右田喜一郎からも強い影響を受けている¹⁵⁾。第二次世界大戦後、東京商科大学から他の二教授と共に公職追放を受けたが、その後、神奈川大学、専修大学等で教鞭をとり、経済地理学会の会長、日本地域学会の理事等を歴任している。研究歴においては、1935年に『経済立地学』を、38年にはウェーバー（A. Weber）の「Industrielle Standortlehre, Grundriss der Sozialökonomik, VI. Abt., 1914」の訳書『工業分布論』を出版、経済立地論の分野の草分け的存在となり、戦後は立地論の研究でかなりの評価を受けている¹⁶⁾。

さて、江澤の地政学に関する論及は、1930年代末から40年代初期に盛んに行われた。『地政学研究』（1942）、『地政学概論』（1943）、『南方地政論』（1943）等の著書をはじめとして、地政学に関する論文を数多く発表している。そこで江澤の研究論文をたどってみると、立地論の研究の中で経済地理学の方法に疑問を抱き、その研究を進めるうちに政治地理学への懐疑から地政学へ近づいていったことが読み取れる。そこで、まずは江澤の経済地理学観とそれをめぐる当時の（経済）地理学の学界状況に目を向けてみよう。

② 江澤の経済地理学

江澤はまず、経済地理学をはじめとする人文地理学が自然科学的思考に隷属しており、経済主体としての人間を自然と同価値と考え、終局的に、「人間を以て自然的な反応の媒体にすぎぬものと見なし、自然に対する人間の作用を自然科学的な因果関係の下に考察している」と論難している。そしてこうした立場では、「自然との対立を解消し、自然を以て価値実現の単なる契機として止揚するところの、自由なる意志の立場に立つ経済的人間を全面的に把握することはできない」とその限界を指摘する。つまり、自然は制約ではなく、人間の価値実現の一つの契機にすぎず、人間精神

がそれにより自らを型として地域的関連の中に顕現するのであり、経済地理学をその型をとらえる地域類型学として精神科学的立場に立脚するものと位置づけるのである。

「自然科学的な立場の論理的基盤に関する積極的自覚によるヘルダー (J.G. von Herder) の人文地理学上の立場、すなわち精神科学的立場は、フリードリッヒ (ラッツェル著者注) 等の場合には未だ意識的に把持されていないのである。しかるに、人間と対立する意味に於ける自然が精神の発展過程に於いて単なる契機として止揚されると共に、精神はかかる契機を自らの中に保存し、自らを型として地域的関連の中に顕現すると考えられる。此の様な意味で自然を地域的関連として論ずる立場こそ、高次の意識によって支持された精神科学的立場なのである。

かかる立場から、われわれは経済地理学をひとつの類型学として見ようと思う。かかる類型学は又、妥当なる意味に於いて立地学とも呼ぶことができよう。」¹⁷⁾

江澤にとっては、ウェーバーの立地論の自然に対する見解も、それを条件(制約)として捉えている点で、まだ自然科学的発想に隷属しているのであり、精神科学として経済地理学を位置づける為に、人間を自然との対置から引き上げて考えなければならないとするのである。このような江澤の方法論的試みの背景には、当時の学問をめぐる二つの状況が指摘できるだろう。

まず第一には、当時の経済地理学をはじめとする人文地理学の日本への導入環境である。経済地理学に関して言うならば、わが国における高等商業学校や商科大学等における授業の必要からドイツの経済地理学が1920年代後半から積極的に受容されるが、その受容態度は特殊研究に関する研究方法として取り入れようというよりも、通論的であったことが指摘されている。そして、その基本となった経済地理書の多くが、K・ザッパー (K. Sapper), E・フリードリッヒ (E. Fliedrich) ら主として自然地理領域の研究者の手によるものであり、また、同時に受容側の執筆者にも自然地理畑の研究が含まれていたことが同様に指摘されている (春日, 1982)。つまり、経済地理学はその成立において自然地理学を基盤にした学問的延長

上にあつたのである。しかし、こうした経済地理学の受容の一方で、ドイツでは、経済学の分野でウェーバーの立地論等の、立地や地域空間の理論的解明を目指す空間経済学的研究が進められ、江澤らにより日本へ導入されてくる。おそらくこの時江澤は、自然地理学の延長上に立った経済地理学が立地論等の空間経済学的研究に比して科学的説明能力の点で短絡的であることを意識し、また同時に地理学に社会科学的方法論からの比較、接近を試みたドーフェ (K. Dove) らの論文に数多く触れたことが推測される¹⁸⁾。

第二に挙げられるのは、大学時代に影響を受けた左右田喜一郎の文化主義哲学である。左右田は大正期に日本における社会科学に対して、新カント派哲学の立場から本格的な哲学的反省をはじめて試みた人物である。この時期、近代化の先発国からの直接的導入と盲目的受容の水準を超えていなかった社会科学の状態の克服とその主体的な獲得をめざす体系的、哲学的反省が求められていた中で、左右田は経済学の立場から考察を加え、独自の経済哲学を展開したのである。その経済哲学の詳細についてはこの論考の範囲を超えるので触れないが、左右田の社会科学に対する哲学的反省の基本姿勢は次のように要約される。

「大正初期における日本市民社会の形成、資本主義的階級矛盾の激化という基盤の上での近代的〈個〉の自覚の高まりを、ドイツ留学での経済学研究を通じて学んだ新カント派哲学の立場で受けとめ、一方で福田(徳三著者注)にみられるようなブルジョワ合理主義の経済理論、社会政策理論の自然主義的、心理主義的欠陥を衝き、これを文化主義の方向へ徹底化させ、他方社会主義理論(特に唯物史観)に対抗して、リッケルト(H. Rickert)等の西南学派の文化科学の思想に立脚しつつ歴史哲学を展開した。」¹⁹⁾

つまり左右田は、資本主義社会の合理化・物象化に伴う現代の市民社会化においてあらわれる個の「人格」の「自然科学的概念化」に対し批判を加え、福田らのブルジョワ合理主義的個人主義やマルクス主義における個人の把握の根底に、〈存在〉から〈価値〉を引き出すという自然主義があり、そこでは個人が「数量的単位」へとおとしまれられてしまうと批判するのである²⁰⁾。これは明らかに、先に述べた江澤の自然科学的基盤に立つ経

済地理学への批判のなかに述べられている議論に通じていることがわかる。しかしながら、人間を自然と同価値におとしめている自然科学的発想からすくいあげようとする思考は、ドイツ理想主義の伝統の下に流れる人間理性への信頼に起因するもので、後に「理性的人間＝知識層」という背後の図式に対する高踏的であるという批判につながるのである。

ところで、経済地理学をはじめとする人文地理学を自然地理学の派生的な位置から開放しようとしたことは、江澤に限ったことではなく、この時代の、人文地理学の研究にたずさわるもの達の共通した動きであったことも指摘しておかなければならない。例えば、この人間存在を無視した（もしくは軽視した）地理学に対し、人間存在を含む総合的人文地理学を切り開こうとした小田内通敏らは、その試みの一つとして、1926年に雑誌「人文地理」を発売し、そこにヴィダル・ド・ラ・ブラージュ (P. Vidal de la Blache) の地理学を日本へ流入させる拠点を求めた²¹⁾。つまり江澤の、左右田哲学の影響下で洗礼を受けた新カント派哲学（特に西南学派²²⁾）に基づいて経済地理学を構成し直そうとした試みは、江澤なりに人文地理学を自然地理学から学問的に独立させようとした方法論的模索だったわけである。

③ 経済地理学から地政学へ

こうした経済地理学における江澤の方法論的反省の試みは、それにとどまることなく、政治地理学分野へ及んだ。そして、ラッツェル流政治地理学の「自然科学的発想」をのりこえるものとして彼は「地政学」に活路を見だしていくのである。江澤にとっては、ラッツェルの地理学も所詮自然科学的思考にのっとったものであり、それはラッツェルが地理学を生物科学の一種として位置づけようとしていたことからわかるとし、「ある特定の形をした岩にあたって波が常に同じ形に碎けるごとく、生命体の運動に対しある特定の自然条件は常に同じ値を示し、限界と制約になる」という言を引いて、その自然科学的発想の上に成り立った政治地理学は自然地理学の変形にしかすぎないとするのである。つまり、彼の地政学は「地政学＝背景としてのラッツェルの国家有機体説」という図式にはのらない点で独特といえるし、京都学派の哲学を援用する京大グループのよ

うに皇道精神といったとらえどころのない精神主義をもち出さない点で、あくまでも科学として地政学の方法論を確立させようと試みていたものと評価することができる。

江澤はまず、地政学をもって「近世における地理学の発展のひとつの方向を示唆するものと見ることができると指摘する。そして、地政学をナチスの宣伝機関であるとして批判する見解に対し、「地政学を非難し、之に対して政治地理学等を固執するものが、果たして政治地理学等の方法についてどれだけの反省を持っていたであろうか。むしろ政治地理学等こそ、そのディレッタント的色彩を未だ払拭し得ないことを自覚しなければならぬ。」と反駁するのである。

江澤によれば地政学と政治地理学の基本的相違はその空間概念にみられるとしている。政治地理学における空間は、自然科学的空間であり、それは「力の場の変容たる景観または環境にすぎなく」、又「われわれの体験から切り離された外部的な力の現れにすぎない」と考える。そのために「国土」という空間は単に「景観または環境という類概念の中に包括される種概念であり、例示であり、単に微表によって他の種概念としての景観から区別されるに止まる」とする。そしてそれは、「類概念の内容として代替性をもっている」と論ずる。つまりAという空間もBという空間も景観を構成する要素に何等異なりがないなら「空間A＝空間B」であるという図式が成立し、そこからはおのおのの国家の空間化としてあらわれる国土やそれを構成する民族の価値や意味といったものは全く出てこない。それに対して、精神科学の立場に立つ地政学上の空間は、時間性（歴史性）や人間性を欠如させた単なる類概念ではなく、人間性の顕現としての類型であり、意味をもつ「場所」であり、単に地表が要素により区別されるものではなく、「空間A＝空間B」という図式は決して成り立たない。空間Aも空間Bも「全体」の中でそれぞれ意味、価値を有するもので、それは単なる個性のない部分ではなく「全体」の中の意味ある「部分」であるとする。ここから結局、国土、国家、民族のそれぞれの価値というものを引き出すことになり、国家膨張主義に加担してしまう素地を生み出してしまうのである。（第2図）。また、江澤は自らの考える地政学的空間

の概念の源をヘルダーにまでさかのぼり、それからリッター (K. Ritter) へと流れる潮流の一端に自らの地政学が位置づけられるとする。ところで江澤の経済地理学からはじまり、地政学においても述べられている「類型」という考えもそもそもはリッターの地理学にみられるもので²³⁾、こうした思想の背景には有機的自然観、ないし観念論的なドイツ自然哲学の思想が流れている。つまりこれは、「自然」を1つの全体とみる哲学であり、また部分は全体を反映し全体は部分に宿るという考え方である。ここで自然は人間と対立するものではなく、人間の始原的生は「生ける自然」に包含されているという考え方がでてくる。リッターがこうした背景のもとに人間を含めて地表を満たすものに「体系」なり「法則」を求めるために取り入れたのが類型学の方法であり、それにより実証科学として地理学を確立しようとしたのだが、江澤もこうした伝統の上に立って地政学を構成したのである。

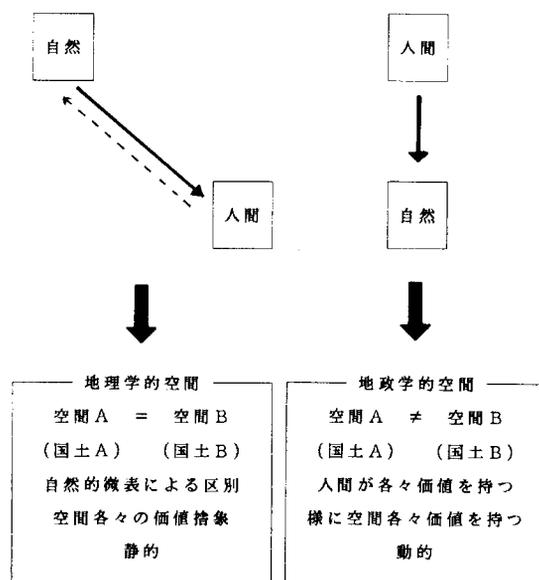
しかし、ここで注意しなければならないのは、リッターの地理学における体系や法則の背後に、意味ある秩序を生み出す「神」の存在が意識されているという点である。江澤はこれを、神にかわり人間理性への信頼に基づくドイツ理想主義の流れをくむ新カント派哲学を取り入れることでのり

こえようとするのである。

さらに、江澤はこの類型を固定化されたものと考えず、「個人がそれをめぐって変容し、それに向かって努力するところの『生ける類型』である」とし、自然科学的方法論に欠如した時間性 (歴史性) への配慮を過去のみならず未来まで含むものと考えることで、結果として悪名高い国家拡張主義への接近を果たしてしまうのである。

④ 地政学の限界への認識

類型を生けるものとして捉えたことで、そこには「予断」の入り込む余地がもうけられ、地政学はその科学性をさらに空虚なものにしてしまう。江澤自身もそれは認め、「地政学はこの限りにおいてその客観性のある程度まで犠牲にしなければならない」とする。けれども、「地政学の目睹する目的はいうまでもなく学問であるのみならず芸術であり、少なくとも技能である」というハウスホーファーの言を引いてきて、それは「必然的飛躍である」と称するのである。ここに、江澤自身が自然科学的地理学から脱却するために「観念論的に居直ってしまった」²⁴⁾とする批判がでてくる。しかしながら江澤は、地政学の科学としての限界を強く意識しつつも、地政学上に自己の精神科学的な地理学を築こうと試みたのである。それは同時に、ウェーバーの立地論が静的なものを対象としていたのに対し、立地の論理を動的にとらえ、地理学の常に現実を自然から説きおこして説明するに終わる姿勢に反対して現実をよりよい現実へと変容させていく論理的バックボーンたるべきとして地理学を構成し直そうと苦闘した結果でもあった。しかし結局、それはやはり戦争という空間闘争の時代において、内的な矛盾をそのままにして外的に解消しようとする時代的な思考の制約を受けていたといえよう。そして同時に、ヘルダーからリッターに流れる思想の延長上に学問を築きながらもその“神の計量”という目的論的考え方から“神”のみを脱落させ、新カント派哲学を取り込むことで、「合理的」説明を行おうとしても、結局はその依拠する新カント派哲学の、生の非合理的現実や人間の実存へのまなざし等からの遊離という欠陥をも取り込んでしまったのである。



第2図 江澤の空間概念模式図

注

3. おわりに

江澤謙爾の地政学を中心として、地政学が時局迎動的なものとしてだけではなく、当時の地理学の方法論上の反省から生まれてきたものとして位置づけられることをみてきた。しかし、その反省の試みは評価できるとしても、思想内容自体には著しい限界があり、結果的には、論理的飛躍を自らも認めざるを得ない部分を含んでいたこともみえた。そして、その哲学的反省が、同時に、背景とした哲学それ自体の限界をそのまま背負ってしまっていたことも指摘した。しかしながら、地理学(人文地理学)における認識論的反省を行う上で、常に空間としての国土、それを動かす国家なり民族を意識せざるを得なかったという時代的制約を考慮に入れるならば、人文地理学を研究する上で無批判に空間や地域といった用語を使用するのに比べてその姿勢には一定の評価が与えられてしかるべきであろう。江澤の学問的志向は「思弁的色彩が強い」と表されることが多いが²⁵⁾、それも、実学的傾向が強かった地理学を「学問」としていかに確立させるかを常に研究者として自問していた結果とみることが出来る。

現在においても地理学の研究対象に対する認識論的基盤についての考察に取り組み、それに様々な哲学からの援用を行うものが多い(現象学、プラグクティズム、マルクス主義哲学等々)。地理学の学問的体系を整え、確立する上で、こうした方法論における哲学的反省は必要なものであろう。しかし、この場合、江澤が新カント派の哲学の限界を引きずったように、その援用する哲学自体の限界を明確に意識しておかないと結果的に空論を導き出してしまう。地理学がやはり実証科学である以上、その方法論的反省は常に、実証性をいかに確保していくかということを念頭に置いておかななくては行けない。

本論文では、地政学を人文地理学導入初期の時期におこった方法論的反省の延長上にあるものとして位置づけ、議論してきた。今後はより広くさまざまな地理学の方法論議とその思想史的な背景、時代的制約、その実証性の確保等々について考察を進めてみたいと考えている。

- 1) ゲオポリティーク (Geopolitik) の日本語訳。英米語の Geopolitics は内容的相違は別として、地政学とは訳さない。
- 2) 竹内 (1974), 191p.
- 3) 同上。
- 4) 水岡 (1974), 194p.
- 5) 同上, 195p.
- 6) 竹内, 正井編 (1986), 133p.
- 7) 山本 (1943), 42p.
- 8) 竹内 (1974), 183p.
- 9) 水岡 (1974), 179p.
- 10) 竹内 (1974) によれば、京大グループの地政学には以下の3つの側面があったことが指摘されている。①日本文化の伝統の中に地政学の伝統を発見していく仕事であり、思想史と社会史の流れの中から切り離して先人の言を無原則、恣意的に集めたものである。②日本精神を強調し、地政学とその基礎としての地理学の理論を結びつける論理は「皇道精神」である。③学問の目的は①②により、欧米の東亜における謀略史を説くものである。
- 11) 日本地政学協会に関わった飯本信之の回想によれば(佐藤, 1989)、雑誌出版のための用紙調達の便宜を考え、海軍の上田を会長にすえたという。
- 12) 国内の地域研究を主な内容としている。
- 13) 佐藤 (1989), 107p.
- 14) 商大では地理学は担当せず、ドイツ語を担当していた。
- 15) 江澤の学生時代をおくった当時の東京商大の学問的雰囲気を表して以下のような回想がなされている。「われわれの学生時代の雰囲気はなんとなしに哲学ばかりやるような状況で、(中略) 大正末期から昭和初頭にかけて、いわば“哲学時代”でした。」(一橋大学学閥史刊行委員会, 1986, 1210p.) 当時、左右田は学内外においてその文化主義哲学で有名であり、江澤の思考の哲学的傾向もこの学生時代に培われたものと思われる。
- 16) その「消費者空間構造理論」はドイツの著名な学術雑誌 (Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft) にも掲載され、国際的に評価された。
- 17) 江澤 (1938), 19-20p.
- 18) Dove, K. (1919) : über die Berührungspunkte sozialökonomischer und wirtschaftsgeographischer

- Betrachtungswise Weltwirtschaftliches Archiv. 14 等。
- 19) 平野 (1983), 210p.
- 20) 同上, 211p. 及び左右田 (1921)。
- 21) 野澤 (1982), 227p.
- 22) 19世紀後半から20世紀の初頭, 自然科学優位による哲学蔑視の風潮に反対してカント復興運動がドイツに生じた。西南学派はウィンドルバンツ (W. Windelband) やリッケルト (H. Rickert) らによるもので, 彼らは自然科学, 歴史 (文化) 科学に始まり, 政治・芸術等の文化全般に関してその認識論的基礎形成を行った。
- 23) さらにリッターの「類型」の概念の原型はペスタロッチ (H. Pestalozzi) に依拠している。
- 24) 竹内 (1974), 186p.
- 25) 例えば青木・河野 (1986) によれば, 「江澤経済地理学の第一の特色は, ドイツ古典哲学の影響による思弁哲学的色彩がつよく, 経済地理学というよりもむしろ経済地理学哲学を展開しておられる。」という指摘がなされている。

主要参考文献

- 青木外志夫, 西岡久雄編 (1967) : 『経済立地の理論と計画』, 時潮社。
- 青木外志夫, 河野敏明 (1986) : 『経済地理学』, 一橋大学学園史刊行委員会編『一橋大学学問史』, 一橋大学, 485-507。
- 江澤譲爾 (1938) : 『経済地理学の基礎理論』, 南郊社。
- 江澤譲爾 (1939) : 『最近の経済地理学に於ける空間概念』, 文化諸科学学界展望, 2, 151-169。

- 江澤譲爾 (1942) : 『地政学研究』, 日本評論社。
- 江澤譲爾 (1943) : 『地政学概論』, 日本評論社。
- 春日茂男 (1982) : 『ドイツ学派と日本の経済地理学』, 京都大学地理学教室編『地理の思想』, 地人書房, 256-270。
- 佐々木彦一郎 (1927) : 『ゲオポリテックとエコノミック』, チオグラフィ, 地理学評論, 3-4, 99-101。
- 佐藤由子 (1989) : 『飯本信之が語った地政学』, 地理, 34-10, 105-107。
- 水津一郎 (1974) : 『近代地理学の開拓者たち』, 地人書房。
- 左右田喜一郎 (1921) : 『文化価値と極限概念』, 岩波書店。
- 竹内啓一 (1974) : 『日本におけるゲオポリテックと地理学』, 一橋論叢, 72-2, 169-191。
- 竹内啓一, 正井泰夫編 (1986) : 『地理学を学ぶ』, 古今書院, 128-140。
- 多田文男 (1975) : 『日本地理学会50年の歩み』, 地理学評論, 48-9, 609-615。
- 野澤秀樹 (1982) : 『フランス学派と日本地理学』, 京都大学地理学教室編『地理の思想』, 地人書房, 223-232。
- 一橋大学学園史刊行委員会編 (1986) : 『一橋大学学問史』, 一橋大学。
- 平野英一 (1983) : 『社会科学の哲学』, 古田充, 鈴木正編著『近代日本の哲学』, 北樹出版, 206-225。
- 水岡不二雄 (1974) : 『現代地理学における「地政学」の復活』, 経済, 119, 175-196。
- 森滝健一郎 (1971) : 『現代地域科学批判序説』, 経済地理学年報, 17-1, 1-18。
- 山本忠一 (1943) : 『地政学と地理教育』, 地政学, 2-8, 36-49。

A Methodological Reconsideration of Geography and *Geopolitik* Yoriko FUKUSHIMA